東京の教育
復刊第二十四号　東京都教師会発行
（事務局）横浜市都筑区茅ヶ崎南四ノ十四ノ一ノ三一〇

日本教師会第六十回教研大会報告

会長　佐藤　健二

本年八月六日七日の両日、兵庫県教師会主管による教研大会が、神戸市のホテル北野プラザ六甲荘で開催された。研究主題は「学びに向かう力・人間性をどのように身に付けさせるのか」。初日は、午後一時から開会式があり、若井勲夫日本教師会会長の挨拶、続いて赤司久明兵庫県教師会会長による歓迎挨拶、次に来賓挨拶として全国教育関係神職協議会を代表して大阪の福島天満宮宮司寶來扶佐子氏が祝辞を述べられた。

開会式後には記念講演があり、兵庫県教師会会員で阪南大学流通学部教授の平山弘氏が、「日本の伝統と歴史をどのように教育に生かすのか」という演題で話をされた。平山氏の問題意識は、武漢ウイルスやロシアのウクライナ侵攻などにより、今までプラスで評価されてきた国際化やグローバル化、情報化・IT化の危うさが今や明らかになったということ、いくら真面目に働いても日本人の平均賃金は先進国の中で相対的に低下するばかりであり、かつては競い合っていた米国とはいつのまにか約二倍近い差が開いてしまったということ、また皇室問題など国を二分するような問題が発生しているといったことなどを踏まえて、日本の伝統と歴史をいかにして教育に生かすことができるかという話で、巧みな比喩を使いながら話をされ、興味深いものであった。

二時半から実践発表Ⅰの高等学校の部として、二〇〇八北京五輪女子マラソン元日本代表の中村友梨香氏が、「部活動を通した人間性の育成」と題して、ご自身の兵庫県立西宮高校陸上競技部で、初参加ながら全国高校駅伝三位になったという体験を踏まえ、あるべき部活動について動画を使いながら発表をされた。このような日本を代表するアスリートの発表は、教研大会としても初めてのことであり、現在働き方改革の一環として、教員指導の部活動が岐路に立っていることもあり、貴重な発表であった。

中学校の部として、元西脇市立中学校教諭で現在同楠丘小学校教頭の柳川瀬輝彦氏により「やりとげる力を培う道徳教育―オリンピック選手との交流を通して―」と題して、現在勤務されている楠丘小学校で行った道徳の授業の報告をされた。「忍耐力が児童生徒の未来を決定づける土台」であるという認識に立って、東京オリンピック女子一五〇〇メートル８位入賞の田中希実選手を招き、子供達との交流を通して、努力を続けることにより夢が叶うのだという思いを子供達が持つようになったといった話をされた。

休憩の後、四時五〇分から五時二〇分まで総会が開かれた。東京都教師会の佐藤を議長に選出し、令和三年度の事業報告や令和四年度の事業計画といった議案を審議、すべて問題なく承認された。この場で特にお伝えしておくべき重要な決定事項は、人事である。長年会長として会の運営に尽力されてきた若井会長が退かれることとなった。新会長としては、三重の皇學館大学教授渡邊毅氏が選任され、承認された。渡邊氏の異動に伴い空席となった副会長に、今まで事務局次長であった東京の佐藤が、また佐藤が異動したあとの事務局次長には京都の鈴木克次氏が就くこととなった。八月は引き継ぎ期間として、新執行部は九月一日からのスタートとなる。

二日目は、午前九時から元陸上自衛隊西部方面総監部幕僚長・陸将の福山隆氏による「皆様の『生命の力』倍増を！」と題した特別講演があった。福山氏は、一九九五年三月二十日に東京で発生した地下鉄サリン事件において、サリン除去作戦の指揮官であった。その特異な体験から、日本人の「心の荒廃・砂漠化」を痛切に感じられたそうで、日本人の心を改善する方法はないかと思索を重ねられ、たどりついたのが、福山氏独特の「神心統一法」であった。それはご自身のカトリック信仰と思想家中村天風が確立した「心身統一法」とを一体化させた独自の「神心統一法」である。それは神（仏）と天風の「心身統一

法」とを融合させて、それにより「日本人のうち沈んだ『心』を活性化」させるというもの。今までの教師会にはないユニークな講演であった。

次に実践発表Ⅱとして小学校の部の発表があった。発表者は丹波篠山市立矢上小学校教頭石井健一氏で、「小学校外国語教育における学びに向かう力・人間性等をどのように身に付けさせるのか」と題し、ピクチャーカードを使った英語の授業の一コマを他の先生の協力を得ながらやってみて下さった。ピクチャーカードには丹波篠山の食材が描かれていて、それを使って「ふるさとメニュー」を作るといったもので、子供達が英語で会話しながら食材を選び、ふるさとメニューを作っていく。小学校の英語授業の一端を知ることができ、興味深かった。

その後、渡邊毅副会長により大会の総括があり、十一時五十分から閉会式。岐阜が次期開催地に決まったことを受けて、岐阜県教育懇話会会長の橋本秀雄氏から挨拶があった。最後に副会長の佐々木健氏により閉会挨拶があり、すべての日程が滞りなく終了した。

今回の大会は、会員の発表が少なかったことに問題が残ったが、その代わりに今までの大会にはない日本を代表する方からの話が聴け、意義のある大会となった。

会の準備、運営に当たられた赤司会長をはじめ兵庫県教師会の会員の皆様には、この場を借りて御礼申上げる。

外国語専科となって

田中依子

今年度から会員になりました田中依子と申します。現在、世田谷区の小学校で外国語専科として三～六年生の英語の授業を担当しております。今後、一緒に学ばせてください。よろしくお願いいたします。

二〇二〇年度から小学校英語教育が本格的に始まりました。私は中学校、高等学校の英語の免許を持っていたので、以前からたびたび「外国語専科になりませんか」と管理職から打診を受けていましたが、担任以外に興味がなかったのと、英語よりも日本語の方が大事という思いがあったので断り続けてきました。ただ、いよいよ英語教育が本格的に始まるという段階になり、高学年を担当する教員の負担を想像し、また、少しでも子供たちにとって有益なものにしなければという思いが勝り、外国語専科への転身を決めました。英語の免許を持っているとは言え、私が大学で学んだのは二十五年も前のことで、当時の英語教育は今とは全く異なるものです。「教わった通りに教えるな」と様々な研修で言われています。ましてや新しい指導要領が目指しているのは「主体的・対話的で深い学び」です。今までの知識重視で教師主導の教える教育から、学習者中心の学ぶ教育へと転換が求められています。私もこの二年半、いくつも研修を受けながら試行錯誤で取り組んできました。二年半経ち、今、感じていることは、小学校英語が果たせる役割もあるということです。

まず第一に言語教育という点についてです。十歳までの子供は聞こえた通りにまねをするのが好きで、音に合わせて歌ったり踊ったりするのが得意です。また、間違いを恐れずに英語を使ってみようともします。さらに、何となく聞いていれば分かる日本語とは違い、英語は注意深く聞かないといけません。聞き取れた言葉から話者の言いたいことを読み取る必要もあります。結果として「聞こうとする意志」が高まります。これは言語教育という観点から国語教育にもプラスだと考えられます。我が校のＡＬＴ（Assistant Language Teacher：外国語指導助手）はフィリピン人で英語はかなり訛っているので、話す人によって英語の発音やイントネーションは異なるものだということを自然と体験しています。「何とか伝わった！」「何となく言っていることが分かった！」という経験は自信になりますし、自分の話す英語や相手の話す英語がネイティブスピーカーの英語とは違っても通用すると分かることで、早い時期にネイティブ信仰から脱却できるよさもあります。

第二に異文化理解の入り口という点についてです。昨年度、スロベニア共和国や台湾など、数か国の小学生とカード交換をしまし

た。このような活動が、他国について学ぶ機会、自国について気づく機会となっています。私は大学時代にアメリカに留学したことがありますが、中西部の田舎町だったこともあり、日本を知らない人がたくさんいました。中国の隣と言ってやっと何となく「そのあたりね」と分かってもらえました。GDPが世界第2位の時代だったにも関わらずです。アメリカ人は自分の国が豊かなので、他国や他文化に興味がないようでした。今、子供たちに「どこの国に行ってみたい？」と質問をすると「どこにも行きたくない。日本がいい。」さらには「自分の部屋が一番。インターネットがあればいい。」といった言葉が返ってきます。外国は治安が悪いし、ごはんがおいしくないと言うし、日本がいいと言うのです。今の子供たちの姿が当時のアメリカ人と重なって仕方ありません。早い時期から異文化に触れることで、自国の文化の理解もより深まると考えます。

外国語専科として私が取り組むべきことは、「真の国際人」を育成することであると、今とても実感しています。「真の国際人」とは、自分の国の言葉や歴史、文化について知識があり、それをしっかりと伝えることができる人です。そのためにも、私自身が日本語や、日本の歴史・文化についてもっと学びを深めていかなければならないと強く感じています。

（会員）

戦前の中学国語の教科書を読む（十八）

［次の文章は、八波則吉編『現代國語讀本　巻六』（昭和十年修正七版・現在の中学三年後期相当）所収のものである。漢字は当時の正字、送り仮名は現在と違ふところが多いが原文通りとした。読み仮名は、適宜新たに加へた。紙面の都合で二回に分けて掲載する。］

先驅者（上）

水上瀧太郎

與謝野寛氏の歌集「相聞」に、森鷗外先生の序文がある。その首に、「一體今、新派の歌と稱してゐるものは、誰が興して誰が育てたのか。この問に『俺だ』と答へることの出來る人は與謝野君を除いて外にはない。」といふ一節がある。試に問へ「一體、今、大正の文學と稱してゐるものは、誰が興して誰が育てたのか。」と。この問に「俺だ。」と答へることの出來る人は、森鷗外先生を除いて外にはない。少くとも、先生がゐられなかつたら、今日の日本文學を育てるには、なほ多くの歳月を要したであらう。その先生が亡くなられた。

明治・大正に亙つて、今日まで執筆するほどのものは、たとひ直接先生の門に出入してその教を受けなかつたとしても、その影響を受けぬものは殆どないといつても差支ない。非凡な頭腦と比類のない精力とを以て、あらゆる方面の先驅をなした先生の拓かれた道を、多數のものは遙かに遲れて、とぼ〳〵と辿つて來たのである。

洵に先生は先驅者だつた。先驅者としての誇と、先驅者としての寂しさとを、先生は生涯身にしみ〴〵と味はれただらう。先生を想ふ時、私の胸には常にその孤獨の姿が描かれる。

先生が始めて筆を執られたのは、明治十四年の頃だと聞く。自分などが多少なりとも理解を以て先生の文章を讀むことが出來るやうになつたのは、明治三十年代のことだから、先生が若々しい意氣を以て、頭の惡い世人の所論に容赦なく痛擊を加へられた時代のことは、明白には知るよしもないが、察するに、知識欲に燃え、學問の研究に心を傾け、且藝術家としては、その鋭敏な神經に觸れる一切のものに、活々とした感應を持てあますほど持つてゐられた先生にとつて、論ずるもの自身の頭の中でさへはつきりしない思想と、その發表された論理形式の矛盾とは、見るに見兼ね、許すに許しがたいものだつたに違ない。

先生のお書きになつたものを自分が始めて讀んだのは幾歳の年だつたか確とは記憶せぬが、兄の本箱の中にあつた「めざまし草」を竊み見たことは、今も明かに覺えてゐる。子供の時から穎才を以て稱された兄は、藝術に對して強い憧憬と正しい理解とを有つてゐた。七つちがひの弟に生れた自分は、この兄のお蔭で、「少年世界」に對する興味を失ふ頃、

一足飛に一流の作家の作品に接することが出來た。

兄の本箱には、紅葉・露伴・鷗外・二葉亭・柳浪・鏡花、その他當時の優れた諸家の作品とともに、その頃文壇の權威だつた「新小説」や「文藝倶樂部」や「新著月刊」などがいつぱい詰つてゐた。自分の茶碗や箸は、必ず庭の清水で手づから洗はなければ承知しなかつたほどに潔癖だつた兄は、また此等の本を大切にすることが一通りではなかつた。折目もつかず汚れ目も見えぬ本が、文學好きの少年にとつては涙ぐましいほど懐かしい紙の匂を罩めて、兄の勉强部屋の押入の本箱に整然と納めてあつた。餓鬼大將になつて、近所の子供達を集めて、角力を取つたり、陣取をしたりして、一日中あばれ廻る自分ではあつたが、時には屢々人目を避けて、大人の讀む本を竊み見る興味は早くから持つてゐた。他人が手をつけて汚すことを怖れる兄の留守を窺つて、自分はその本箱にある本を殆ど悉皆讀んだ。「めざまし草」などはむづかしくて解らなかつたが、それでもこれを愛讀したのを考へて見ると、一面には甚だ子供らしかつた自分も、一面には甚だ早熟だつたものらしい。

（続く）

（原注及び編集者注）

水上瀧太郎　本名は阿部章藏。東京市の人。明治二十年生。明治生命保險株式會社取締役。

（編集者注）慶應義塾大学卒業。小説家、評論家、劇作家。大阪毎日新聞取締役。代表作『大阪の宿』『銀座復興』評論集『貝殻追放』など。昭和十五年没、享年五十二。

與謝野寛　舊號は鐵幹。京都市の人。歌人。昭和十年歿、年六十三。

（編集者注）よさのひろし。妻は與謝野晶子。明治三十三年詩歌を中心とした雑誌「明星」を創刊。北原白秋、吉井勇、石川啄木などを世に出す。代表作歌集『東西南北』『天地玄黄』など。

森鷗外　名は林太郎。島根縣の人。醫學博士。文學博士。陸軍軍醫總監。大正十一年歿、年六十三。

（編集者注）亡くなったのは、七月九日である。東京大学医学部卒業。陸軍軍医となりドイツに留学。その傍ら多数の小説・評論を執筆。代表作『舞姫』『青年』『雁』『阿部一族』『高瀬舟』『渋江抽斎』など。

兄　名は泰二。明治十三年生。日本銀行員。

めざまし草　月刊の文學雑誌。

少年世界　月刊の少年雑誌。

紅葉　尾崎德太郎。

（編集者注）尾崎紅葉。慶應三年東京に生まれる。明治を代表する小説家。明治三十六年没。享年三十五。代表作『金色夜叉』。

露伴　幸田成行（しげゆき）。

（編集者注）幸田露伴。明治二十二年、東京に生まれる。小説その他多方面の文学活動に従事。代表作　小説『五重塔』、史伝『頼朝』、俳諧研究『評釈芭蕉七部集』など。第一回文化勲章受章者。昭和二十二年没、享年七十九。

二葉亭　長谷川辰之助。

柳浪　廣津直人。

（編集者注）廣津柳浪。小説家。文久元年（一八六一）長崎に生まれる。東大医科中退。小説家。代表作『黒蜥蜴』『今戸心中』など。昭和三年没、享年六十七。

鏡花　泉鏡太郎。

（編集者注）泉鏡花。小説家。明治六年金沢で生まれる。尾崎紅葉に師事。幻想文学の先駆者。代表作『高野聖』『婦系図』『歌行燈』など。昭和十四年没、享年六十五。

新小説　文藝倶樂部・新著月刊とともに月刊の文藝雑誌。

お願い

一、会費納入

年額　二千円

口座　「みずほ銀行」港北ニュータウン支店

店番号　７４３　普通預金　１３３０１５０

名義　佐藤健二

二、原稿募集

「東京の教育」への会員の皆様のご投稿をお待ちしています。

送り先は題字下にあります。また、メールの送り先は次の通りです。

事務局アドレス（佐藤）

komasato@juno.ocn.ne.jp